

令和6年度（2024年度） 第1回東海市不登校対策協議会 会議録

- 1 日 時 令和6年（2024年）6月12日（水）
午後3時から4時
- 2 場 所 市役所302会議室
- 3 出席者 東海市医師会理事 朝倉 直子
社会福祉協議会事務局次長兼地域福祉課長 宝達 真志
主任児童委員 菊本 裕也
知多福祉相談センター主任 蛭川 允
日本福祉大学 教育・心理学部教授 鈴木 庸裕
スクールカウンセラー 鎌田 陽世
東海市立緑陽小学校長 廣田 雅明
東海市立平洲中学校主任養護教諭 早川 悦子
東海市立上野中学校生徒指導主事 木原 啓裕
幼児保育課 指導保育士 川口 満子
こども課主任 木村 智明
健康推進課 主任指導保健師 大串 文子
- 4 傍聴者 なし
- 5 事務局参加者
東海市教育委員会 教育長 鈴木 俊二
教育部長 小島 久和
学校教育課長 桜井 正志
学校教育課 主任指導主事 明壁 啓純
" 指導主事 池田森太郎
" 指導主事 高橋 民子
" 統括主任 永田 紀子
" 教育相談員 坂口 栄子
教育支援センター「ほっと東海」
教育相談員 武田 基二
教育相談員 深谷 公子
教育相談員 田島 一朗
スクールソーシャルワーカー 飯田 彩花
スクールソーシャルワーカー 西 実莉
スクールソーシャルワーカー 甲斐菜奈美

6 会 議

- (1) 教育長あいさつ
- (2) 委員・事務局自己紹介
- (3) 会長・副会長選出、あいさつ
- (4) 協 議

ア 令和5年度（2023年度）における不登校の状況について（非公開）

イ 令和6年度（2024年度）不登校対策の方針と取組について

（指導主事より資料に基づいて報告）

学校が児童生徒にとって「心の居場所」となるように、学校生活における様々な場面で一人一人の自立への援助をするとともに、児童生徒の状況を早期に把握し、学校として組織的に対応していく。

① 組織的な不登校問題対策の推進

○居場所としての学校・学級づくり、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、心の相談員の配置、楽しい・分かる・できる授業の構築、幼保小中との密なる連携を図る。

② 不登校児童生徒対応と不登校予防対策の推進

○グループ支援活動の推進・充実、各校における指導部会の実施と資料の累積を生かした支援、不登校対策協議会での提言を不登校対策担当者会に反映させ、不登校対策のあり方について点検・評価できる体制づくりを行っていく。

③ 教育支援センターの充実

○「ほっと東海」での不登校児童生徒の学習指導や自立支援活動を充実させ、学校との連携を密にするとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーも交えたケース検討等情報交換会を充実させる。

④ その他

○子どもの自立と未来を語る会(旧:進路ガイダンス)、教育支援センター交流会、青空教室等を不登校対策事業の一環としてとらえ、不登校児童生徒を幅広くサポートしていく。

ウ 主な意見

○学力不振で学校に来られない生徒が増えていると感じる。

○今年度より「コネクトルーム」と名前を付けて、別室対応を実施している。現在9名の生徒が利用をしており、本人のペースを大切にして居場所となるように対応している。

学習に苦手意識をもっている生徒や学力が低い生徒もいるため、別室で静かに

課題に取り組むことができない状況も見受けられる。教員間でも、別室で勉強に取り組ませるべきなのか、または、本人の好きなこと（折り紙・絵を描くなど）に取り組ませるべきなのか、議論しながら、試行錯誤の中でスタートしている。

- 子どもの知的な力があるかないかというだけではなく、そのベースに家庭が安定しているかどうか非常に大きな影響を与えるのではないか。
- 家庭への支援がとても必要になってきていると感じている。
- 学校の先生が教育に集中できるよう、学校においても福祉が入っていく必要があるのではないか。
- 家庭の中で、親が子どもの気持ちを必要以上に尊重してしまうなど、親と子どもの主従関係が逆転している家庭もある。家庭でのルールが通らない中で、学校のルールやきまりの中で生活していかなければならない子どもたちに困難さが生まれ、不登校につながっていく可能性は高いのではないか。
- スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、関係諸機関などで必要に応じてケース検討会議を開き、帰一的評価と今の評価と家庭ベースの私的評価をクロスさせ、今の子どもを立体視することが有用だと感じる。
- 不登校の要因を様々な視点で、関係諸機関が協力し合いながら探っていくことが大切ではないか。
- 子育てに対する関心はあるが、具体的に何をどうやったらよいのかなど、手だてが分からない保護者が増えつつあるように感じる。
- 子どもに、こんな声かけをしたら気持ちを立て直すことができるのに、その一言がないとそのままくじけていってしまうなど、気持ちの立て直しを自分でするまで行うことができる力が身に付くよう、励ましていく手助けは年齢が低いうちに行う必要がある。
- 幼稚園、保育園から小学校へ接続する時に、心配な家庭については、キーポイントとなる人などの情報をしっかりと引き継ぎしていく必要がある。
また、伴走型と言われているように、就学前にどのような手助けや支援を行ってきたかを情報共有していく必要がある。
- まず一人を救う、みんなを救っていく、どの子ども大事にしていく姿勢は、とても大切だと感じる。